

「やりくり」の材料としての「主観・客観」

生田 聡史

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: ikuta_st@fuzoku.tottori-u.ac.jp

Satoshi IKUTA (Tottori University Junior High School): "Subjective / objective" as a material for "managing"

要旨 — 非定型の解や解のない解を探求していく「やりくり」をしていくにあたり、それまでに身につけている知識や能力が「やりくり」を進める要素の一つとなってくる。これは国語科の学習でも同様である。今年度、早い段階の国語学習で、「主観」と「客観」の視点を入れて「読む」ことを行うと、生徒から良い反応が返ってきたという経験をした。そこで、「やりくり」を進めていくための、事前に身につけておくべき知識・能力の一つとして「主観・客観の視点を入れて文章を『読む』『書く』』ということが挙げられるのではないかとすることに思い至り、「主観・客観」の視点を入れた授業の実践を行い、そこからの生徒の反応などをもとに考察したい。

キーワード — 主観, 客観, 「やりくり」の材料

Abstract — In pursuing an atypical solution or a solution without a definitive solution, the knowledge and abilities acquired up to that point are a part of the factors that enable versatile attitude and active behavior. This principle also applies to studying Japanese language courses. During the early stages of classes of Japanese this year, I have got good responses from the students when I taught "reading" by incorporating perspectives of "subjective" or "objective". This experience makes me hypothesize "reading" and "writing" sentences focusing on a "subjective or objective" perspective is useful as one of the knowledge and abilities that should be acquired in advance in order to promote flexible "self-managing in daily life". I practiced classes from the viewpoint of "subjective / objective", and discuss effect of the classes based on the reaction of the students to the classes.

Key words — subjective, objective, material for "managing skills"

1. はじめに

昨年度、一年生の国語を担当して、「少年の日の思い出(ヘルマン・ヘッセ)」の学習を展開していった。

その中で、「蝶の収集」のことを、「僕(主人公)」のものは「宝物」,「エーミール(対役)」のものは「宝石のような」と表現してある。このことについて、『僕の宝物』は『主観的な見方』であり、『エーミールの宝石のような』は『客観的な見方』とすると、両者の違いが明確になる」という学習をした。すると、生徒たちの大多数は「よく理解できた」という反応を返してくれた。

同題材を更に展開していく中で、人物像の捉え方として『エーミール』は『嫌な奴』というものが多

かった中、「誰の主観か?」「客観的にみるとどうか?」という視点を与えると、「エーミール」の捉え方が大きく変化した。

このような点から、「少年の日の思い出」に関しては、「主観(的)・客観(的)」という視点を与えることは、読み取りにおいて非常に効果がある、と感じられた。

本年度、持ち上がりで二年生の国語を担当することになり、最初の題材「昔話(星野博美)」という随想を扱った。

そこには「記憶」と「記録」の対比がなされているのだが、「記憶は主観」で「記録は客観」という視点の一つ入れるだけで、筆者の述べたいことが実にすんなりと生徒たちに浸透する、という感覚を得た。

昨年度までは「少年の日の思い出」に限り、「主観(的)・客観(的)」の有用性があると意識していたが、本年度の最初の題材でも、「主観(的)・客観(的)」の有用性を感じた。

ここで感じた有用性は、どれくらいの範囲で有用なのかという確認がしなかったことと、「主観(的)・客観(的)」の視点が本校研究主題の「やりくり」の材料になりはしないかという期待から、今回の考察を進めていこうと考え始めた次第である。

2. 言葉の意味

2.1. 「広辞苑 第六版」より

「主観」

①〔哲〕(subject の西周による訳語) 客観に対する語。語源的には流動する作用・性質・状態を担う自己同一的な実体、基体(subjectum)を意味する。近世以後意味を転じ、対象の認識を構成する自我や意識の意となった。特にカントでは、主観は生得の、一定の形式・法則に従って、客観的对象を構成する超越論的主観とされた。カント以後は、単に認識主観にとどまらず、実践的能動性と自由の基体として主体とも呼ばれる。②自分ひとりの考えや感じ方。長塚節、写生の歌に就いて「歌は到底__を交へなければ成功するものでない」

「主観的」

①主観による価値を第一に重んずるさま。主観に基づくさま。②俗に、自分ひとりの考えや感じ方にかたよる態度であること。

「客観」

〔哲〕(object) ①主観の認識および行動の対象となるもの。②主観の作用とは独立に存在すると考えられたもの。客体。

「客観的」

特定の個人的主観の考えや評価から独立して、普遍性をもっていること。

2.2. 国語の授業での意味

国語の授業における「主観・客観」は、2.1.の①は当てはまらない。哲学的な意味合いは不要で、②にあたる一般的な意味としてとらえる。

「主観」

自分の考え方や感じ方を中心とした見方。

「客観」

特定の主観から独立し、ある程度の普遍性のある見方。

(「ある程度の」と付けたのは、言語を使って事物を表現するとき、完全な「普遍性」というのは存在しないと考えるからである。しかしながら、この部分を言及すると、生徒の混乱を招きかねないので、授業では触れていない。)

なお、一般的に文学的文章は「主観的」で、説明的文章は「客観的」と言われるが、説明的文章には「客観性」は大きな要素ではあるが、意見や主張が入る段階で必ず「主観」が入るので、説明的文章においても「主観(的)・客観(的)」の視点はあってよいと考える。

3. 実践における「主観・客観」の視点

○「昔話(星野博美)」随想

生きていく上で大きな支えとなるのは、「客観的な記録」ではなく「主観的な記憶」であるということ。

○「逃げることは、ほんとにひきょうか(なだいなだ)」説明・評論

社会生活をしている人間は、「逃げることはひきょうだ」と言う(言われる)が、これは「主観的」な意見か、「客観的」な意見か。

○「吟味された言葉(大江健三郎)」随想

脳に障害がある筆者の息子「光」が「祖母(筆者の母)」との別れ際に、「元気を出して、しっかり死んでください!」と言う。この言葉を「客観的」に捉える意味と「祖母」の視点で「主観的」に捉える意味との違いを考える。

○「幸せなスピード(大林宣彦)」随想

「馬のスピードが人間にとって一番幸せなスピード」と言ったダ=ヴィンチの価値観と、「効率の良いスピード」を良しとしている現代人の価値観とを、それぞれの「主観」で比較してダ=ヴィンチの真意を考える。

○「クリスマスの仕事(田ロランディ)」小説

フォルクローレの演奏を生業としている「僕」が、植物状態の患者の前で演奏すると人間の輪郭をした光が浮遊し飛び回る。この状態は「客観的」に起こっていることではなく「僕」の「主

観」が感じている状態であることを考え、ファタールという読み取りをする。

○「短歌十五首」短歌

短歌を味わうために、筆者の「主観」に近づき、どのような感動を表そうとしているのかを模索する。

○「父のようにはなりたくない（阿部夏丸）」小説

「吾郎（父）」の生き方を肯定的に捉えられない「サトシ（息子）」は高校に進学したくないと考えているマイノリティーである。ところが「サトシ」自身、「吾郎」の奇抜な釣りの方法を「邪道」と言い、マイノリティーを批判する。「サトシ」の「主観」にはマイノリティーに対する矛盾をはらんでいることに気付くことで、「サトシ」の心の揺らぎを捉えていく。

○「源平争乱の歴史語りー平家物語」古文

「敦盛の最期」を現代文の小説にしていく作業で、「誰の視点（主観）」で話を進めるのか、あるいは「自分自身の俯瞰的な視点(客観)」で話を進めるのか、明確にして進めていく。

○「人の世と心のスケッチー徒然草」古文

筆者兼好は「高名の木登り」では「主観的」に話を進め、「猫また」では「客観的」に話を進めていることに気付き、敬語の使われ方なども考え合わせて、主語を限定していく。

○「論語」漢文

「孔子」の「学問に対する思い（主観）」を念頭に置き、私たちと少し違う高位の価値観を考えていく。

（それぞれの授業はA, B, C, D各組で行った。可能な限り生徒からの「主観（客観）の視点を取り入れる」という思考法を待ち、多くの場面でそれが叶ったが、クラス・題材によっては教師の方から視点を与えたこともあった。）

4. 生徒の反応

4.1. アンケート

3.で述べた実践が完了した12月下旬に、「主観・客観」に関するアンケートを全クラスで行った。記述が多いアンケートとなったため、回答の質には回答者の向き合い方で大きく異なっ

質問一：「主観（的）・客観（的）」の意味を、自分の認識している範囲で説明してください。

質問二：あなたは二年生の国語の題材のうち「主観（的）・客観（的）」を意識して読む（考える）必要があったと思うものはどれですか。次の〔 〕に必要があったものに〔○〕、分からないものに〔△〕、必要がなかったものに〔×〕を入れてください。

・昔話〔 〕 ・逃げることは、ほんとにひきょうか〔 〕 ・吟味された言葉〔 〕 ・幸せなスピード〔 〕 ・クリスマス仕事〔 〕 ・短歌十五首〔 〕
・父のようにはなりたくない〔 〕 ・源平争乱の歴史語りー平家物語〔 〕 ・人の世と人の心のスケッチー徒然草〔 〕
・論語〔 〕

質問三：あなたは「主観（的）・客観（的）」を意識して文章の読み書きをする際、どのようなことが明確になると考えますか。

質問四：あなたは「主観（的）・客観（的）」を意識し始めたことで、文章の読み書きに関して何か変化を自覚しますか。思い当たる限りのことを書いてください。

有効回答者数：128人

4.2. アンケートの意図

質問一

「主観（的）・客観（的）」を正しく把握しているかの確認

質問二

3.で述べた実践の意図が生徒の視点にあったのかの確認。及び題材の種類において有用性の差はあるかの確認。

質問三

知識としての有用性。

質問四

実感としての有用性。

4.3. アンケートの回答結果と考察

4.3.1. 質問一について

主観については128人（100%）正しく理解していた。客観については「他が自分をどう見ているか。」のような捉え違いをしている者が23人（18.0%）あった。

4.3.2. 質問二について

「昔話」随想

○：64.8% ×：5.5% △：28.9%

「逃げることは、ほんとにひきょうか」説明

○：83.6% ×：6.3% △：9.4%

「吟味された言葉」随想

○：61.7% ×：7.8% △：29.7%

「幸せなスピード」随想

○：64.1% ×：15.6% △：19.5%

「クリスマスの仕事」小説

○：56.3% ×：14.8% △：28.1%

「短歌十五首」短歌

○：46.1% ×：28.9% △：25.0%

「父のようにはなりたくない」小説

○：82.0% ×：4.7% △：28.9%

「源平争乱の歴史語り—平家物語」古文

○：18.0% ×：46.9% △：34.4%

「人の世と心のスケッチ—徒然草」古文

○：31.3% ×：25.8% △：43.0%

「論語」漢文

○：32.0% ×：31.3% △：36.7%

随想・小説・説明のような純粋な読み物は、「主観・客観」を意識する必要性を多く感じている。しかし、短歌・古文・漢文では必要性を半分以上が感じていない。これは短歌・古文・漢文の学習が言語事項の学習であるという先入観から、読み物としてとらえようとしていないとの予想ができる。

4.3.3. 質問三について

「異なる立場により主張が違うことが理解しやすくなる。」…53.9%

「登場人物の気持ちや、筆者の言いたいことがはっきりする。」…35.9%

「誰の思いか、何を言おうとしているか等文章の内容がはっきりする。」…29.7%

大きく大別すると上記の三種の意見にまとめられた。

主観・客観を意識すると他の意見（見方）と自分の意見（見方）の違いを認められると半数以上が感じているようである。

また、内容面でも読み取るうえで多くのことが理解しやすくなると感じている者も多い。

4.3.4. 質問四について

「物事を多面的に見るようになった。」

…23.4%

「誰の視点なのかを考えるようになった。」

…22.7%

「登場人物の気持ちや、筆者の言いたいことが分かりやすくなった。」…20.3%

「話の内容が分かりやすくなった。」

…12.5%

「文章を書くとき、何をどう書くのかが分かりやすくなった。」…9.4%

「文章を読むのがおもしろくなった。」

…1.6%

「変化がない。分からない。」

…10.2%

「主観・客観」の視点が意識の中に入ること、国語の授業に限らず、思考の方法に「多面的」で「深み」が生まれてきているように見える。少なからず良い影響が出ていると言えるのではなかろうか。

5. まとめ

物事を思考・判断・表現する際、「主観・客観」の視点を意識することは、有効な一要素となると考えられる。そして、それは「やりくり」をするうえで、重要な事項であるとも言えよう。

今回集めたデータは客観性が少々不足しているという点は否めない。しかし、生徒の記述による回答に、多くの肯定的意見が見られたことで十分有用性があると言えるものと考えている。

今後の課題としては、

- ・「客観」の正しい捉えさせ方
 - ・「主観・客観」の意識の浸透方法
 - ・古文・漢文での「主観・客観」の視点 等
- まだ克服していくべきことがあるので、これらは引き続き実践において推し進めていきたい。

6. 追記

1月現在、「走れメロス（太宰治）」を題材として授業実践を行っている。「メロスは勇者か」という解のない解を探求しているのであるが、既に数人の生徒から「主観的に見ると、客観的に見るとでは答えが変わるので迷ってしまう。」というような感想を聞いている。

まさに「やりくり」真っ最中の生徒の姿が教室にはある。